

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2004

8



21世紀保育ブックス

最新刊

編集委員 森上 史朗 (子どもと保育総合研究所代表)
柴崎 正行 (大妻女子大学教授)
柏女 霊峰 (淑徳大学教授)

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ!

21世紀保育ブックス⑩

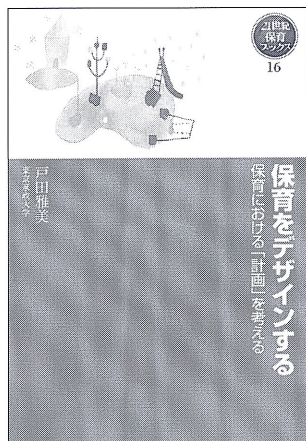
保育をデザインする 保育における「計画」を考える

戸田雅美(東京家政大学) 著

「保育の計画」とは、一人ひとりの子どもの思いを実現していながら、その育ちも保障されていくように、また、子どもと保育者が一緒に創り出す遊びや生活の全体が豊かになるように、保育を「デザイン」していくことです。保育者がどんなふうを考えながら、保育を計画しているのか。そしてそれはどのように表現されているのか、もしくは「デザイン」されているのかについて、さまざまな事例を読み解いていくという方法で考えていきます。だれもが悩んでいる「保育計画」の考え方・書き方を詳述。保育者必携の書です。

【目次から】

- 第1章 保育はオーダーメイドデザイン
- 第2章 指導案に見る保育のデザイン
- 第3章 環境に見る保育のデザイン
- 第4章 保育における「計画」～種類の違いをどう生かすか～



B6判 144頁 定価1,260円(税込)

既刊本

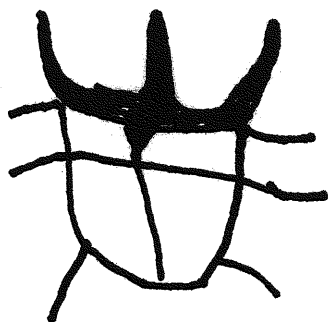
- | | |
|------------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真美 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真美・尾木まり 共著 |
| ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑩保育者が会おう発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |
| ⑪保護者の要望をどう受けとめるか | 小笠原文孝 著 |
| ⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る | 吉田正幸 著 |
| ⑬子どもの健康を考える | 巷野悟郎 著 |
| ⑭「わたしの世界」から「わたしたちの世界」へ | 今井和子・神長美津子 共著 |
| ⑮21世紀の子育て支援・家庭支援 | 伊志嶺美津子・新澤誠治 共著 |

以下続刊

キンダーブックの **フレーベル館**

幼児の教育

第103巻 第8号





幼 児 の 教 育 目 次

— 第一〇三卷 第八号 —

© 2004
日本幼稚園協会

巻頭言 幼児期にはぐくまれる母語の土台

耳のことは・目の言葉……………内田 伸子…(4)

卒業する子どもたちの姿から想うこと……………田代 和美…(8)

世界の子育て事情(3) デンマーク……………山本 真実…(13)

特集へ緑蔭図書紹介

別の見方で自己を見る―自我と無我と心……………平澤 伸一…(20)

絵本が描く心の世界……………井原 成男…(24)

子どもの時……………河野 優子…(30)

自己を物語る―『きよしこ』『拡散』を読む……………浜口 順子…(33)



昭和戦中期の保育問題研究会の活動(3)

自由遊びに関する研究……………松本 園子…(36)

ポジティブサポートの世界(8) 変化が起こす変化(2)……………村田 愛…(44)

障碍をもつ幼児の保育(24)―この子と出会ったとき―

水―なぜこんなにも水遊びが好きなのか……………津守 真・津守 房江…(53)

乳児クラスの保育より(3)

一年の終わりと始まり―一歳児クラスへの進級―……………田辺 敦子…(58)

はれ! ときどき…その⑤……………さとうひろこ…(63)

表紙絵／藤原ヒロコ

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「床屋の看板魚」

編集委員／田代 和美・浜口 順子・佐藤 寛子・吉岡 晶子・仲 明子

編集部／河合 聡子

巻頭言

幼児期にはぐくまれる母語の土台

耳のことば・目の言葉

内田 伸子

はじめに

幼児期には、子どもに、たっぷり「耳のことば」を聴かせたい。「耳のことば」をからだに刻む体験は、美しい日本語の土台をつくるために不可欠だからである。子どもに語りかけるとき、保育者は「耳のことば」を聴かせているだろうか。

一、保育の質を知る手がかかり

私はよく保育を見せていただく機会がある。さまざまな幼稚園や保育所の自発的活動の時間を見るとき、園の規模や方針、保育形態とは関係なく、その園から受ける、ある印象がある。その印象とは、子ども一人ひとりが充実して遊んでいるかどうかを全体として感じ取るもの



で、「いい雰囲気」というようなことは表現できるものである。この印象は、その園の保育の質を知る手がかりとなる。

「いい雰囲気」をもたらす源には三点ある。第一に、子どもから受けるものである。子どもはよく遊んでいるか。見学者がいても知らん顔で自分の遊びに集中しているか。やたら騒いでおらず、落ち着いて自分の活動に取り組んでいるか。

第二に、保育室の物的環境がかもしだす雰囲気がある。本がきちんと修理されているか。お花がセンスよくいけてあるか。ごっこ遊びのコーナーには既製品だけではなく、手作りのものも置かれているか。机や椅子は子どもの座高にあっているか。子どもの手の育ちにあわせて道具が用意されているかなど、子どもの心とからだの育ちへの配慮が行き届いた空間かどうか。保育室の雰囲気をつくりだしている。

第三に、保育者のすがた、表情、子どもに語りかけることばが保育室の雰囲気をかもしだす重要な要因だ。保育者は子どもたち一人ひとりの動きに敏感か、過干渉ではないか、歩く姿はリズムカルか、子どもに機敏にに応じているか。とりわけ、保育者が子どもにどのように語りかけているか。そのことばづかいに優しさや品が感じられるか。子どもの心に響く「耳のことば」で語りかけているか。これらのことは、保育の質を推し量る手がかりとなる。

二、保育者は「耳のことば」で語りかけているか

英文学者の外山滋比古氏は「わが子に伝える『絶対語感』」（飛鳥新社、二〇〇三年）の中



で、乳幼児期に語り聴かされる母語が美しい日本語の土台となると訴えておられる。子どもは胎児期から母親のことばを聞いている。誕生後はことばが埋め込まれた社会的やり取りや活動に参加するうちに母語の「絶対語感」が刷り込まれていくのである。

絶対語感とはことばを使う人が無意識にもっている「ことばの規範」であり、文法、語彙、調子、アクセントを決定するものである。美しい音楽が絶対音感を育てるように、絶対語感も美しい母語を聴くことによって身についていく。乳児期〜幼児初期には、動きと結びついた「母乳語」が子どもの心にしみ込み、習慣化する。

母乳語が土台になって、動きや活動から少し距離のある、抽象的な「離乳語」が獲得されるようになる。この母乳語から離乳語への移行期に「早まって文字など教えることは子どもにとつてたいへん迷惑な教育」と指摘しておられる。この指摘は、読み書き教育に対する私の立場と全く同じだ。発達心理学には遊びや活動を通して絶対語感（音韻的意識）が習得されてからでないと、文字の学習をやらせても意味はないという証拠がたくさんあるからである。

三、母乳語から離乳語への誘い

母乳語から離乳語への移行期には、おとき話や昔話を「耳のことば」でくりかえし聴かせることが不可欠なのだ。外山氏は「耳からことばを聴いて育つことで『聡明』になる」と説く。読み上げられた目の言葉ではなく、語りかけられた耳のことばを、くりかえし聴くことによって離乳語が身についていくのである。



外山氏はお茶の水女子大学附属幼稚園長であられたとき、子どもたちにお話の「語り聴かせ」を実践されていた。附属幼稚園では月に一度開かれるお誕生会で、大人たちは何か出し物をして、その月にお誕生日を迎える子どもたちをお祝いするのがならわしとなっている。先生がたは音楽劇をしたり、お母様たちは歌を歌ったりする。園長先生も例外ではない。園長先生の出し物は、昔話やおとぎ話の語り聴かせであった。

園長先生は文字の言葉、目の言葉で流暢に読み聞かせることはなさらない。園長先生が子どもたちの前に立たれると、子どもたちはビタツとおしゃべりをやめる。目が輝き出す。園長先生が耳のことばでゆつくりと語りかけると、最年少の三歳児ですら全身を耳にして、園長先生のことばに聴き入った。子どもたちは、月に一度のお誕生会で、園長先生から昔話を語り聴かせてもらえるのを楽しみにしていた。

おわりに

幼児期には美しい日本語の土台をしっかり育てたい。日頃から保育者は、子どもに心を込めて「耳のことば」で語りかけていただきたい。子どもは大好きな先生のことばには全身を耳にして聴き入るはず。保育者のことばはいつの間にか子どものことばになっていく。聴き手から美しい日本語の語り手へと成長していくのである。

(お茶の水女子大学)

卒業する子どもたちの姿から想うこと

田代 和美

今年の三月は、珍しいことに幼稚園、小学校そして中学校を巣立つ子どもたちの姿に出会うことが出来た。幼稚園では二年ないしは三年前に入園した頃の子どもたちの姿や園生活の中で出会った様々な姿や表情を思い浮かべるにつけ、一人ひとりの子どもたちの成長を目の当たりにして驚きに近い感慨を覚えた。この一年間は訪れることができなかった園

だったのだが、成長というのは基点があって初めて感じられるものなのだということも改めて実感した。それと共に式次第に入っている敬礼とは対照的に、「おおきくなったら、パン屋さんになりたいです」「おおきくなったら、サッカーせんしゅになりたいです」。そうやって一人ひとりが語る言葉を聞きながら、自分の好きなものや自分の好きなことが

「大きくなったら……」の後に続けられることの幸せを感じた。でも改めて考えてみると「大きくなったら」という言葉は、子どもたちの中で一体どのような意味を持っているのだろうか。今の自分と繋がっているのだろうか。それとも別の存在に変身するイメージなのだろうか。それで思い出したが、自分の子どもが小さかった頃、保育園での七夕飾りの短冊に書く子どものお願いを、毎年代筆していた。

確か二、三歳の頃、「大きくなったらパンダになりたい。大きくなったらキリンにもなりたい。」と書いた憶えがある。その当時は動物が大好きだからと思っていたが、今想えば、子どもはおそらく「大きい」ものを想像したのだろうと思う。そう言えば、二番目の子どもが小さかった時、年の離れた姉と必死に渡り合っていたのだが、よく「わたし、大きかった時に○○ちゃんと映画に行ったんだー」なんて言っていた事も思い出される。星に込める願いが

大きくなったら何になりたいかという願いに置き換わることは、園の習わしなのか子どもの特性なのかは定かではないが、その後、先の子どもの短冊の願いはセーラーूमーンになりたい、ラーメン屋さんになりたいという言葉に変容していった。非現実的な夢から現実的な夢になっていくと言ってしまえばそれまでだが、行ったり来たり出来る多層的な時間とは別に、過去・現在・未来というリニアな時間の流れがあることを感じ取ることと幼児期という時代は終わりを告げるのかもしれない。そしてまた、大きくなったら……に続く好きなものやあこがれがあることは、子どもたちが日々大きくなり続けていることと切り離せないものだとも思う。

時を同じくして、小学校を巣立つ子どもたちが同じように「将来の夢は……」と語る場面に偶然出会う機会があった。「将来の夢は、サッカー選手になることです」や「日本一のバスケットプレイヤーに

なりたいです」や「将来の夢はコックさんになることです」「将来の夢は優しい看護師さんになることです」というように自分の身体を使って、直接手応えを感じられるものや、人に喜んでもらえるような夢が多かった。学校の先生になりたいという子どもが一人もいなかったことはどう考えていいのか……

とも思ったが、でも大人の身勝手さなのだろうが、幼稚園を卒園する子どもたちと、どこか似ている幸せ感をともなう夢を小学生はまだ持てていることに、少し安堵してしまった。それと共にこう言えるのはあとのくらいなのだろうと、その後の大きな変動をよけいなお世話ではあるが案じてしまった。

一方で将来の夢には、その時代の動き、メディアで取り上げるものや身近な大人の価値観などが否応なく染みこんでいることも改めて感じた。子どもだって社会の中で生きているのだから当然といえば当然なのだが、時代や社会というものは、幼稚園を卒園

する子どもたちにとっての「大きくなったら」と同じように、小学生にとって見えないものだ。だから、それを知らず知らず取り込みながらも身近な手応え感覚を大切にしているのだろう。

そんな将来の夢を語っていた小学生だった子どもたちは、中学校の三年間を終える頃には、将来の夢から進路という形での現実的な壁に向き合わされる時間を経る。おそらく小学校を卒業する時に語ったであろう将来の夢は、高校受験の際の志望理由書には書くのが憚られるようになっていくことが多いだろう。私が経験した時代とは大きく変わり、また刻々と変わり続けている制度や多様な選択肢の中で、子どもたちはそれぞれが迷い、考え、そして新しい場に歩を進めていくことになる。大人から見れば狭いと思われるクラスや部活動の世界のなかで、お互いに深くかわるることにより異質な考えに出会い、思いっきりぶつかり合い、泣いたり笑ったり大

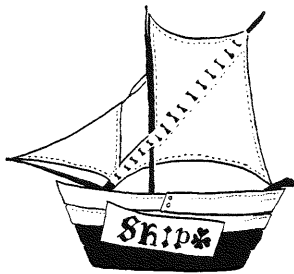
忙しの中学校三年間を終えた子どもたちは、卒業に際して号泣していた。世界が狭いなんていうのは、

大人が勝手に言うことで、たとえ物理的には狭い世界の中でも、そこで深くかわるることによって、そこから広がりのある心を持てるのだとこの三年間を通して改めて子どもたちから教えられた。差異はどこにでもあるし、差異とみなすか否かはそれぞれが判断することである。そして差異を認めた場合に、どうやってそれを乗り越えて一緒に活動していくかは、中学校という世界だけでなくどのような世界においても通じる貴重な経験であったと思う。

一つの場での生活を終えて、それぞれの子どものちの新しい場での生活が始まる。「大きくなったら……」と言える幼稚園・保育園を終える子どもたちが、ほぼ身体は大きくなってしまった中学校時代を終えるまでの間、そしてそれに続く時間も含めて、大人のかかわり方はそれぞれの時代で異なるが、子

どもたちが夢を描く将来について、その責任の一端を担い続けていることに違いはない。

こう書いている途中で、イラクで日本人が拘束され、彼らの命がイラクからの自衛隊の撤退と引き替えになつていくというニュースが入ってきた。テレビでは、人の命は地球より重いという言葉とテロとの戦いにおける世界の中の日本の貢献という言葉がぶつかり合っている。一体誰が何を守ろうとしているのか。日々のニュースを見て様々な質問をしてくる子どもたちに大人として何を語れるのか。自分の考えを伝えることは出来る。でも、それと真つ向から対立する考え方を頭ごなしに否定するだけでいいのだろうかと迷うことがこのところずっと続いてい



る。子どもたちの日常生活の場でも常に相対する考え方が拮抗している。大局的立場から子どもを見る立場と一人ひとりの子どもという立場で子どもを見る立場と、保育現場での日々の子どもの生活と、国の進める政策と。位相の異なる立場の考え方が一つの場に混在して、ごちゃ混ぜになっている。

それらの間に相互のすりあわせが出来ないままに日々が流れいくもやもや感を抱えながら、でも子どもたちとの日々が少しでも楽しくなるように希望は捨てずにいたいと思う。時代や政策という大きな相手は、自分自身の言動とももちろん無関係ではなく、そして子どもたちにはじわじわと染みてきたり、急激な変化を強いる。自分としては、子どもたちとの生活の場で、毎日の積み重ねを大切にしていきたいし、一人の人間が出来ることは多くないのだからと立ち位置を動かさないでいたいと思いつつも、でも大きな流れに対して無関心を決め込んでしまうの

は、どこか子どもに対して後ろめたく、大人としての責任を果たしていないようにも思う。二項対立の図式を設定して話を通じない相手方として済ませてしまうのではなく、子どもたちが育つ場の中に入り込んでくる自分の考えとは異なる立場の考えとどのようにかかわっていけるのかをこれからはもう少し考えていきたい。

今月号を以て九年間に亘る本誌の編集から私は卒業する。これからの新しい生活の中では、この九年間が違う形で私の中で生き続けていくことと思う。本誌をこれまで読んでくださってきた方々、書いてくださった方々、ご協力頂いた多くの方々に心より感謝申し上げます。

(大妻女子大学)

デンマーク

山本 真実

一、政策理念と思想

デンマークの子育て支援を理解するためには、デンマークという国が根本に掲げる福祉政策理念を踏まえる必要がある。日本で九〇年代以降、はやり文句のように使われる「少子化対策」、「子育て支援」という用語の意味とは、まったく異なった視点が基礎にあるからである。それは日本の子育て支援と同列には語るこ

る。

デンマーク人の政治に対する関心や参加率は、日本とは比べようもないほど高く、積極的であることはよく知られている。一九九二年に行われた国民投票でEU加入が否決されたことは、デンマーク人の国内政治に対する関心と信頼の高さを物語る事実として記憶に新しい。国民が、自分の国の幸せは国民参加によって保障されるという自覚を持ち、子育て支援といわれる各種の社会政策についても、国民的合意が図られた上

で実施されていることを忘れてはならない。

デンマーク人の気質を表す言葉に「自主独立」がある。個人の独立を保障することが、社会の共生と連帯を支えている。人種も性別も超えた真の普遍主義思想が、子育て支援の根本にもある。子どもも親も社会も皆幸せになるためにはどうしたらよいのか、子どものために母親が我慢することでも、親の仕事の都合に子どもが合わせることでもなく、全ての存在が対等で平等に扱われた上で、満足感の高い生活を維持していくことが目標にされている。

デンマークの女性就労率は、高齢になっても衰えることがない。つまり親によるインフォーマルサポートは、全く期待できない就労構造であるといえる。インフォーマルサポートによる援助が得られない以上、整備すべきはフォーマルサポート、つまり社会的支援である。社会的支援サービスを利用する子どもたちには、できるだけ高質の保育・教育を与えることが、それを利用する親たち、国民の願いである。家庭の負担

を最小限に抑え、子どもを生み育てることが、リスクやハンデイに感じられないような意識づくりが行われている。これが、最終的に少子化への歯止めとして効果を奏している国がデンマークなのである。

ここでは紙幅の都合から、保育をめぐる事項について紹介する。

二、社会的保育 (care) に対する考え方

デンマークにおける保育サービスは「親及び家庭における子どもの養育を円滑かつ意味あるものとするために整備すべきものである」という社会サービス法（付記1参照）の理念に基づき整備されている。フルタイム、パートタイムに限らずデンマークでは共働き家庭が多く、子どもは生活時間の大半を家庭外のケアを受けて生活している。子どもは将来的に積極的な社会参加をする、独立した存在となることを目的として保育サービスが提供される。

デンマークはEU加盟国の中でもスウェーデンと並

んで公費投入水準が高く、サービスメニューのバリエーションも大変多い国である。税金による公費を保育サービスの整備に投入し、公的セクターによって管理する形をとっている。近年、諸外国において福祉（保育）と教育の一元化が行われ、イギリスやスウェーデン、ニュージーランドは教育側に統合している。しかし、デンマークは社会省 (Ministry of Social Affairs) で育児に関することを扱っており、国民生活を支援する（福祉）サービスとして位置づけられている。

デンマークは徹底的な地方分権を実現しており、その実施は市（コミューネ）に任されている。理念（付記2参照）として掲げられた状態を保持・達成できるのであれば、その方法や手法については細かく規定せず、地域住民のニーズと実情に応じてデザインができるようにしている。中央集権型では細かい住民ニーズにこたえられないからである。コミューネのサービスは多様であっても、保育サービスの目的は合意が形成

させられている。

三、保育サービスの現状

我が国でも、現在乳児の配置基準は保育士一人につき乳児三人となっているが、デンマークでは昔から三対一が指導の基準になっている。三〜五歳児の場合もおおよそ保育士一人につき六〜七人の基準で実施されている。デンマークの保育所は決められた時間に毎日利用するというような定型的な利用はほとんどなく、勤務の形態や事情に合わせて、毎日利用の時間が違うことが通常である。保育者も利用者の数や時期に合わせてシフト勤務などを組み合わせ、柔軟に配置できる仕組みをとっている。

施設による集団保育

施設型、家庭的保育型を問わず、ほぼ百パーセントの保育サービスが公による運営である。保育サービスの提供は市町村の行政義務として実施されており、運

▼表1 施設型保育と家庭的保育の概要（註）

	乳児保育園（ヴーグステ） 保育園（ボンホーヴ）	家庭的保育：保育ママ （ダオ プライユ モア）
管轄	社会省 コミューネ	コミュニーネ
預かり年齢	ヴーグステ：6ヶ月～2歳 ボンホーヴ：3～6歳	0～2歳
預かり条件	子どもの保育が必要な場合	
保育時間	原則6時半～17時	基本的には親との相談・合意
利用方法	コミュニーネ窓口申請	親が直接保育ママ家庭に連絡
保育者の資格	幼児教育者（ペダゴ）資格	1週間程度の研修（コミュニーネによる定期監査はあり）
公費補助	個人負担30%以下公費負担70%以上	保育者に対する補助あり（玩具購入費用と別に手当てを支給） 利用者への補助もあり
職員配置基準	ヴーグステ 1：3 ボンホーヴ 1：6～7	1：4～5

営費用は市町村の予算（税金）から賄われている。

デンマークにはわが国で意味するところの「民間」（または私的）の意味のサービスは存在しない。たとえば、宗教的及び教育的思想をもった特別な教育（モンテッソーリなど）を行うということが特色である保育所の場合、公的施設とは違うメニューのサービスを提供できるが、その施設に雇用される保育者（スタッフ）の給与や待遇等はその他の公的施設と同額にすることが、自治体との契約によって定められている。また、これらのサービスにはコミュニーネの役人が参加する運営協議会はない。

利用の決定は、基本的に長期間待機している子どもを優先的に決定する。保護者が失業中であろうと、所得が低かろうと、日本のような得点加算方式ではないとしている。もし、市が提示した保育所が申請者の希望と合致せず、利用したくないとしたは、コミュニーネより援助金が支給され、以後は自分で保育所を探るか、保育者を手当するか、自分で面倒をみるか、いず

れにしても自己解決しなければならない。近年、自らの財力で保育サービスを買うという動きが見られるが、まだ大勢は公的サービスの利用である。

利用料は利用者の負担になるがその上限は運営費の三〇パーセントまでと決められている。利用料金は子どもの年齢に応じて設定されており、同年齢の子どもを持つ利用者の利用料金は一律である。自治体の負担は残りの七〇パーセントになる。利用者負担として徴収された三〇パーセントは、保育所の人件費と活動費の一部にあてられる。また、所得によりデイケア利用料に減額措置があり、低所得者の一部と社会教育的にデイケア利用が必要であると認められた者は無料となる。失業者の場合は失業者手当が所得として換算される。また、母子家庭で母親が失業している場合の利用は無料である。これは保育所だけでなく、いわゆる放課後児童対策（Outside School Hour Care）についても同様である。

家庭的保育（ファミリーデイケア）

家庭的保育（ファミリーデイケア）は、保育サービスの一翼を担う提供手段として活用されている。家庭的保育の当初の設置目的は、施設型サービスの補完であったが、小規模の「家庭的」保育環境を好んで、敢えて選択する場合も多くなっている。また、新しく施設整備を行うよりもニーズの増減に合わせて比較的柔軟に対応することができするため、家庭的保育の形態を中心にサービスを拡充するコミュニネが多くみられる。

保育者として求められる資格要件は特にはないが、自分の子どもの養育経験があること、専用に使できる部屋（六帖程度）があること、定期的に研修に参加すること等である。遊具の購入等に必要経費は給与とは別に自治体から支給される。

家庭的保育の保育者同士は、連絡や情報交換等を活発に行っており、急病の場合等の代行等を行いながら連携協力体制を構築している。デンマークの場合、

オーストラリアに見られるような調整・派遣機関（コーデイネーションユニット）はなく、ネットワークとしての組織力や地域の施設等との連携力等では弱い。自治体の独自の事情に基づき、柔軟に地域のニーズに対応できる方法として活用できるサービスである。

まとめ

デンマークのこのシステムの背景には、子どもの養育は家庭を基礎に行うものであるという合意がある。これは、「自己責任」、「自助努力」という名のもとに、家庭のみに責任を押し付け、公的援助は最小限にしようという日本や米国型の福祉とは違うものである。子どもの権利を保障していく中において、家庭や親との関わりは不可欠のものであり、家庭を豊かにすることが子どもの養育的質を高めていくことであると理解されている。そのためには、家庭の負担、特に女性（母親）の負担や自己犠牲に依存した子育てを行うのでは

なく、全ての国民である父親も母親もが幸せを感じる事ができる社会づくりをしていく一環に子育て支援があるのである。

そのために育児休業制度や父親休暇も整備されているが、育児休業が第一義で保育サービス利用が第二義という考え方ではない。EU統合と共にデンマークの育児休業制度も他ヨーロッパ諸国並になる様であるが、保育サービスに対する考え方が異なることを忘れてはならない。保育所などの社会的ケアを利用することは、親が面倒をみることに大きく劣るものではないと考えられていることが特徴である。子どもが成長する過程の中で、同年代の子ども同士、また異年齢の子ども同士の関わりを経て、社会性を育てていくことも、自主独立感の高い大人に育てていくために必要なことであると考えられているように思う。デンマークの保育サービスは、教育的志向を出来るだけ排除し、子ど



もが生来持つ「生きる力」や可能性を自由に伸ばしていくことに力点をおいたものである。これが可能なものは、生活全体の質を高めることに成功した国、デンマークだけなのかもしれない。(淑徳大学)

付記

1 社会サービス法とは、一九七六年に制定された生活支援法 (Social Assistance Act) の改正後の一つの名称。生活支援法は「社会サービス法」(Social Service Law)、「社会生活活性化法」(Active Social Politic Law)、「社会における権利と管理に関する法律」の三つのパートに分割された。保育サービスの実施については、「社会サービス法」に記載されている。内容は一九七六年生活支援法と同様である。子どもに対するデイケアサービスの提供は子どもの成長・能力開発・独立性の促進を行うことが義務であると明記されている。『デイケアサービスは、子どもたちが安心して刺激的(挑戦的)な日常をすごし、大人との密接な接触があるもの

であるということの基本をおかなければならない。遊戯、空間を通して、子どもたちが自分の主導権を促進させ、自分の能力範囲で挑戦できるということが、企画された(用意された)サービス、集団での活動と融合しなければならない。集団での活動とは、子どもたちが大人とともに創造的、実質的な目的を持って作業し、個々の成長を助長し他の子どもとの協調性を促進できるような文化的な経験でなければならぬ。』

2 保育サービスの生活支援法の関連理念については、拙稿「12. デンマークの子ども家庭サービス①」、「13. デンマークの子ども家庭サービス②」(放送大学教育振興会『子ども家庭福祉論』)、「II-3. 海外における私的(民間)保育サービスの現状」、私的保育サービス研究会報告書『私的保育サービス施設の実態分析とそれへの社会的支援のありかたに関する調査研究』を参照のこと。

註 『世界に学ぼう子育て支援』(汐見稔幸編者・フレールベル館)四十三、四十八頁の表を参考に筆者作成。

別の見方で自己を見る

—自我と無我と心—

平澤 伸一

今はどうか知らないが、私が育ったころ、家には
仏間や仏壇があり、日々お供えをし、時には簡単な
お経を読むといったことが、多くの家庭で普通に見
られたように思う。それは信濃川沿いの小さな町の
ことで、真宗のお寺が分不相応のようにたくさん
あった。そのうえに幼友達とよく遊んだのが天理教
会の丹精した庭に接した路地であったことや、また

日蓮宗系の新興教団の名前をしばしば耳にするよう
になったことを思い出す。そいう時代だったの
か、仏教や神道のような東洋系の宗教が、今の東京
生活にくらべるとずいぶん暮らしの身近にあったよ
うである。そのせいだろうか、二十歳前後になる
と、なんとなく宗教的なもの、とくにゆえもなく仏
教の名にはひかれるものがあった。もっと後になる

と仏教の哲学にあこがれるようになった。すでに科学でも文学でも、むろん宗教でも、何であれ哲学の対象にならないものはないことは知識として知っていた。しかしそういう西洋流の接近法で仏教を知りたいというのではなかった。仏教独自のものの見方や考え方を自分の経験としたかったのだ。医学に進んだのち、西洋医学と異質な東洋医学に一時興味をもったのも自分のなかの同じ傾向によるものだった。ともあれこうして東洋思想との長年のつき合いがはじまったが、巨人の足を這う蟻のようなものがある。しかし、ここに一冊の小さな本があつて、仏教の大伽藍に一条の強力な光を、その深部にまで投げかけている。それを紹介したい。

大正から昭和にかけて浄土門で活躍された笹本戒浄上人（一八七四—一九三七）講述の『真実の自己』（平成十一年うぶすな書院から復刊）がその本

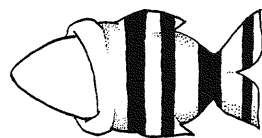
である。難解で鳴る仏教的哲理の方法と洞察が、自我と無我と心をテーマにして興味深く、しかも驚くほど平易なことはで講述されている。上人の伝記を読むと本書の原点が浮かび上がってくるので少し紹介しよう。上人は十六歳のころ「生死輪廻論」と題する文章を書かれ、それをこう結んだ。「上来述べ来たつた処は、古来仏教に説く一切唯心の思想を基底とするに非ずんば、遂に空論に帰すべし」。つまり自分の考えは「一切は心だ」という仏教の真理の上に展開したのだ、と。ところがこれを批評された野上運海師（のち浄土宗管長）はこの一節に対して「この一句、実に千鈞の重みあり。但しこの一事、一切唯心の理、世に隠れて歳已に久し。然らばこの理を解明し広くこれを世に伝ふるを以て汝が終生の任となすべし」と述べられたという。これに上人は、むしろ意外の感にうたれる。一切唯心の理は、仏教においてはすでに日常茶飯の常識なのではな

かつたのか、それなのにその解明の困難なることを
教え、この理を広く世に伝えんことをすすめられる
とは、と。仏教の常識どころか、はたして上人ご自
身、危機なしにはすまなかつたのである。

一切唯心、この仏教哲学の原点をめぐって上人が
どのような苦心惨憺の思惟を遂行されたか。いまそ
の思惟を、臨場感ある、今風に言えは視聴者参加型
の講話としてこの一書に読むことができる。上人は
近代は信仰困難な時代だと言われた。ご自身十八歳
のころを回顧して「最初、私の信仰が全く地を払っ
てしまった時、(浄土) 三部経既に憑たのむに足らず、
我々の精神はこの肉体の死と共に消滅するのである
と考えるに至った反面、私の心中には『なるほど理
屈はそうかも知れない。しかし自分はこのままでは
不安で不安でたまらない。一つ今度は事実に基づい
て、私の心のどこかに不滅の部分はあるまいか、ぜ
ひ探し当ててみたいものだ』との強い強い欲求が湧

然として起こって来たのでありま
す」。こうして上人は来る日も来る
日も天井と睨みっこで「心のどこか
に不滅と名付けられるべき処はない
か、と、事実と首っ引きで真剣に考
え」られた。「かくのごとくして
ちようど十一年目のある日、部屋に

在って書き物をしておりましたが、その時忽然とし
て紙の上を走らせているベンきの軋きりのする処、力の
入っている処、そこに永遠不滅の自己が存してい
た、そこに我々の心があつたのだという事に気が付
きました。太陽が見えている、そこに我々の心があ
るのだと分かってきました。ここに気が付いて見ま
すと、今までは心と名付くる事実を捉えずに、ただ
心という言葉のもつ概念によって心を扱っているの
だという誤りに気がきました。その後電車で東京の
須田町の辺を通っているとき、前方に立ち並ぶ家々



も道路も人も、今はすべて自己心中に認められるようになった事を知って大変嬉しかったことを覚えています」。

『真実の自己』はこのような心の覚醒だけを終始一貫よりどころにして、一切唯心という仏教哲学の原点、いや原風景を照らし出している。その展開のなかでたとえば唯識論や般若思想などの出会いがある。周知のように唯識論はわれわれの心に八つの識を探り当てた。前五識（視聴嗅味触の五感覚）、第六識（いわゆる意識）、第七マナ識（自我観念）、第八アラヤ識（無意識の深層）。各識を解説しながら上人は唯識心理学と近代実験心理学（催眠実験）との橋渡しをも試みられ、興味深い知見を紹介される。とりわけ意識の集中度（統一性）が人間の精神生活にもつ意味、またその変動が平生は思いも寄らない精神の働きを引き出す事実を紹介されながら、大乘仏教は「三昧定中の真理」（非常に深い精神統

一状態ではじめてわかる真理）であることを随所で示唆されている。おそらくはだれでも知っている般若心経の「色即是空、空即是色」の句もまたそのような真理のひとつであることを、少なくとも私にとっては、なるほどそうかと膝を打つように説かれ、蒙をひらかれるのである。

上人は戦前の宗教学（大正大学の前身）、天台宗大学において一般心理学のほかに特殊心理学と題して専攻の「真我の实地認識」に関する講義をされたが、それが本書『真実の自己』講話として結晶していったのである。真我に気付くと一切唯心つまり大宇宙は心であることに気付く。そうでなければ「真実の」と言うことはできない。読む者をそのように励ます力をもつ、事実と首っ引きに考える書であると思う。是非一読をおすすめしたい。

（精神科医）

絵本が描く心の世界

モーリス・センダック 『まどのむこうの そのまたむこう』

井原 成男

はじめに——絵本の心理学

時として童話は、どんな心理学書よりも深く、子どもの心の世界を覗かせてくれる。とりわけ絵本は言葉以上に、その作者の意図を超えた子どもの心の

深層を垣間見せる。今回はそんな絵本の中から、私の好きな、そしてたびたび発達心理学の講義の中で紹介する機会が多い、センダックの『まどのむこう』の『そのまたむこう』の世界を覗いてみたいと思う。

ストーリー

物語は、船乗りの父親が航海に出かけての留守中に、まだ赤ちゃんの妹を守ってくれるよう、母親ではなく姉のアイダに頼むところから始まる。父の留守中、ゴ布林というひどい悪さをする妖怪がさらいに来る。姉のアイダは、はじめ騙されて妹を連れ去られてしまうが、黄色いコートに包まれ、抱えられるように、窓の向こうに飛び出していくのである。

その途中、おそらく父親の乗っている船からのものと思われる船乗りのホーンパイプ踊りの音楽に導かれ、すでにゴ布林たちに赤ん坊にされ、やがては水の中に引き込まれようとしていた妹を見つけ。そして間一髪、妹をゴ布林たちのもとから取り戻し、川に沿って家に帰るのである。家に帰ると、そこにはすでに父親からの手紙が届いており、

手紙には、アイダが妹を守ってくれると信じていると書かれていた。アイダは父の音楽という導きを得て、その言葉どおり妹を守りきったのである。

センダックの制作態度

ストーリー自体はそれほど複雑なものではないが、センダックの完璧主義によって、およそ一年半の試行錯誤を経てのち完成された。センダックの発想自体は直感的で、一気に書き上げてしまう作家であるとされている。センダックは、絵は共同作業で作成することが可能でも、文章自体は完璧なものではないなければならないという持論のもと、関係者を絶ち一人閉じこもって完成させるという。センダックは、田舎の森に一人で、犬と共に住んでいるというが、こうした制作態度は、同じく周りに塀をめぐらし、孤立した形で住んでいるとされるサリンジャーを彷彿とさせる。

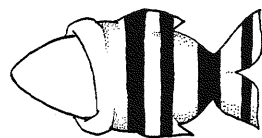
こうした制作の経緯からみても、この物語にはセ
ンダックが直感的にとらえた女の子（女性）の心の
深層が描かれているだけでなく、文章の推敲によっ
て、単なる思い付きではない、心の典型を扱ったも
のになっていると思う。

女の子と父親の役割

父親は女の子が社会化されるに当たって、その手
がかりを与える存在であるとされる。アイダも、は
じめはゴブリンに騙されるのだが、父親の導きであ
る船乗りの音楽に導かれて、妹を守り通すことがで
きたのである。センダックが推敲を重ね、完璧なも
のであると自負する文章を丁寧に読むと分かるのだ
が、導きの底には、最後の手紙にあったように、父
親の絶対的な信頼があった。信頼と音楽という情緒
をも含んだスキルによってアイダは成長することが
できたのである。

アイダが部屋にいる間、窓には父
の船の航行が映し出されている。そ
の様子はアイダの心と平衡して、穏
やかであったり嵐になったりする。
ここには父の心の状態と女の子の心
の状態が平衡するという本質的な心
理も描かれているようである。

面白い事実がある。センダック家のアルバムを見
ると分かるが、この絵本に描かれている赤ちゃん、
つまりアイダの妹は明らかにセンダック自身をモデ
ルにしている。もしそうであるならアイダは、セン
ダックの実際の姉をモデルにし、さらにそれを極上
に理想化した女性像になっている可能性がある。
センダックの母親は実際、どんな人だったのだろ
うか、優しかったのか、それとも身近な姉を理想化
しなければならぬほど厳しかったのか、気になる
ところである。



黄色いレインコートと母

この絵本の原題は「Outside Over There」であるが、「まどこのむこうのそのまたむこう」の他に、「それはすぐそこ」という訳もある。二つは外という外界に対するニュアンスがだいぶ違う。危険な外界はすぐ近くなのか、向こうで遠いのか、かなり違うのである。あるいは、遠いようであるが実際はすぐ近くにあるという二重の意味が込められているのかもしれない。

アイダは、妹を取り戻しに危険な外に出るとき、まず手始めに黄色いレインコートに包まれて、まるで雨から守るように誰かに抱かれているかのようである。色彩心理学の教えるところによれば、黄色は依存の色である。しかしずっとこの姿勢でいることは許されない。父の導きである船乗りの歌は、「うしろむきではなんにもならぬ、くるりまわってホル

ンをおふき」と教えるのである。

アイダはその示唆に従い、すでに赤ちゃんの姿にまで戻され、まるで体内の戻るように、水の中に消えようとしている妹を発見する。

ホルンは、子どもに帰ろうとする子どもの心を前進させる、導きの糸なのである。

ところで、この絵本に登場する母親はアイダの活躍に引きかえ、なんとも力のない、存在感の薄いものとしてしか描かれていない。よくよく考えると妹を守るのは母親の役目なのではないか。この母親には、おそらくゴブリンは見えないと思われる。そう考えると、この物語は子どもを成長させない母親の持つ否定的な面から、それを成長へと導く父親の導きの糸の物語であるとも読めるのである。

ゴブリンと退行

ゴブリンとはどんな妖怪なのか。

辞書によれば、それは子どもを退行させ大人にならないようにさせる悪さをする妖精なのだという。

この絵本では、ゴブリンも生まれたての、ただブウブウ言うだけの赤ちゃんに描かれ、また妹も、その中にすでに紛れ込んだ姿で描かれている。卵の殻から孵ったばかりの赤ちゃんは、分離個体化理論のマーラーの使う孵化というコンセプトを彷彿とさせる。これ以上退行すれば、体内の羊水に還るのかもしれないと思わせる。おそらくゴブリンとは人間の中にある体内回帰願望の憧れと恐怖の部分をイメージにしたものであろう。センダックは彼の直感と感性でそれを描き切っている。

音楽と導きの糸

導く糸が他ならぬ音楽であるのは面白い。センダックはこの物語を書いている間中、モーツァルトの音楽をかけていたという。絵本の中には、妹を助

け出し、小川に沿って道を帰って行くアイダが描かれているが、小川の向こうには、モーツァルトが魔笛を作曲したとき使った作曲小屋が描かれている。センダックは、アメリカ人らしくディズニールランドが好きだっただけでなく、モーツァルトが



とても好きだったという。モーツァルトは先祖がポーランド出身であったというセンダックのヨーロッパ的な深層部分を表しているのかもしれない。老ゲーテが、モーツァルトを聞き、「これは悪魔の音楽だ」と叫んだという逸話は有名であるが、この、人の心の退行と進歩の妙、あるいは恐怖を扱った作品にとっては、モーツァルトの悪魔的な旋律こそがふさわしかったのかもしれない。センダックはモーツァルトの旋律に浸りつつ、この絵本の文章を完璧なものにしたのである。

終わりに——センダックと女性

先ほど、センダック家のアルバムの話をした。そういつては失礼だが、写真で見るセンダックの母親はたくましく、彼の出世作である、『かいじゅうたちのいるところ』に登場する怪物、「おれたちはおまえが、食べてしまいたいほどすきなんだ、食べてやるから行かないでくれー」と叫ぶ怪物たちに似ている。そもそも、『かいじゅうたちのいるところ』の主人公マックスは、いたずらをして、ご飯をお預けにされ、お置置きに母親から部屋に閉じ込められたのであった。

センダックにとってアイダは、こうした厳しい母親を緩和し、理想の母を作り出すための道具立てであつたように思われる。しかしセンダックの直感には、また、この絵本に描かれたような、ほんやりして守られるだけの女性では、子どもは退行しゴブリ

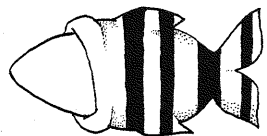
ンにさらわれてしまうだけに終わってしまうということを見抜いている。おそらく移民の子であり、ニューヨークをブルックリンの貧民街から憧れに満ちて眺めていた家族を、このたくましい母親は生き延びさせたのである。

センダックは独身で、ホモセクシャルであつたという。彼が、現実の女性を受け入れるには、女性を巡る優しさだけでなく、こうした女性の逞しき現実をも受け入れることが必要だったのでないだろうか。センダックが、後年その認識にまで達したかどうかは定かでない。

(お茶の水女子大学)

子どもの時

河野 優子



息子が通う小学校では読み聞かせの時間があり、ボランティアのお母さん達が順番に読み聞かせをします。一心にお話に聞き入り、絵を見つめる子ども達と絵本の世界を共有できる一時は、朗読の好きな私にとって、喜びと共に学びの時でもあります。「ああ、面白かった」と子ども達が楽しんでくれた中の一冊に、『ぼちぼちいこか』（マイク・セイラー作、ロバート・グロスマン絵、今江祥智訳、偕成社）があります。「大きくなったら、なんになろう」

大きくて、重くて、力も強い主人公のカバくんは考えます。消防士を志すも、重みに耐えかねて梯子が壊れてしまいます。その後も、バレリーナ、ピアニスト、宇宙飛行士、手品師……と次々に挑戦しますが、その体格と力強さのゆえに、舞台にめり込んだりロケットに取り残されたり、失敗の連続です。でも、カバくんはめげません。挫折に次ぐ挫折で、早く夢が費えて「どないしたらええのんやろ」と途方に暮れてはいても、決して諦めてはいないのです。

ハンモックで一休み、「ま、ぼちぼちいこか、ということや」と鷹揚に構えています。

子どもの心の中にはたくさんの夢が詰まっています。大人になったら……だけでなく、してみたいことがいっぱいです。そんな子ども達に、大人はついつい「何かになること」や「目標を達成すること」を期待してしまいがちです。それも大切なことです。が、失敗したり挫折したりすることも、同じくらい大切なことなかもしれません。カバくんの失敗はとてもユーモラスで、子ども達の笑いを誘います。笑いながら、子ども達は同時に、失敗しても次々挑戦を繰り返すカバくんの姿に勇気をもらってものいることでしょう。「失敗してもいいんだよ」「のんびりいこうよ」と語りかけるこの絵本には、子どもの時をおおらかに味わう豊かさがあるように感じられます。

子どもの時といえ、最近読み返して魅力を再発

見した本の一冊に、『ツバメ号とアマゾン号』（アーサー・ランサム作、岩田欣三・神宮輝夫訳、岩波書店）があります。湖畔に夏の休暇をすごしに来たジョン、スーザン、ティティ、ロジャのウォーカー家の四人の兄弟と、ナンシイ、ベギイのブラケット家の姉妹の物語です。

ランサムの筆は、子ども達一人一人を生き生きと描き出しています。しつかり者で時に大胆な行動をするジョン、家庭的で思慮深いスーザン、夢想家のティティ、無邪気なロジャ……まるで実在する子どものように、彼らの姿は私たちの心に入り込んできます。イングランド北部の湖水地方をモデルにした風景描写も美しく、物語に添えられた地図と共に読む者の好奇心をかき立てます。そして語られる、冒険に満ちた日々。子ども達だけでキャンプをしたり、帆船を操ったり、六人の子とも達は自然の中で休暇を伸びやかに楽しんでいます。

物語は子どもの視点から描かれていますが、周囲

の大人は子ども達をゆったりと暖かく見守っています。子ども達の冒険を、夏休みを支えているのは、実はこの絆なのではないでしょうか。そのことに気付かされるとき、ランサムのお話に息づく子どもの時は、一層輝きを増すように思われます。訳者の神宮輝夫氏は、「訳者のことば」において、それは「人間がもつとも人間らしくなったときに感じる深い喜び」「人間が人間であるかぎり、持ちつづけざる子どもの心を魅了し、大人をも惹きつけるのも、その故かもしれません。

『ツバメ号とアマゾン号』が夏休みの子ども達の冒険を描いた作品であるのに対し、『こどもの季節』（原田和子作、山脇百合子絵、婦人之友社）は、昭和初期の子どもの日常を、瑞々しく描いています。冬眠中のどんぐりを掘り起こしてしまい、「起こしちゃってごめんね」と葉っぱのお布団をそっと掛け

たり、とり年のとりは何の鳥か、真剣に考えたり……作中の子ども達は、とても丁寧に子どもの時を生きているように思われます。年を重ねるにつれ、時の流れがどんどん速くなるように感じられますが、作中のそんな子どもの姿に、一瞬一瞬を慈しんでいた幼い日々が、鮮やかに、懐かしく、浮かび上がってきます。

作者の原田さんは、作中のカコがそのまま大きくなったような方ですが、お話の最後をこう結んでいます。「子どもの季節」はいつまでも続くよ。なぜって、いきものは、みんなそれぞれ自分の「子どもの季節」を大事にもっているんですもの。（中略）だから、おはなしも決しておしまいはならないってわけ」と。

子どもの季節はめぐり、生命もめぐり……。情報も、ものも、溢れるようにある今、子どもをめぐる環境はどんどん変化するかもしれません。子どもが子どもの季節をそのままに享受することも、難しく

なるのかもしれない。けれど、子どもの季節は連綿と紡がれていくことでしょう。そのことを、確か

に感じさせてくれる本です。

(立教女学院短期大学)

自己を物語る

— 『きよしこ』 『拡散』 を読む —

浜口 順子

— 星の光る夜、きよしこは我が家にやってくる。すくい飲みをする子は、「みはは」という笑い声で胸をいっばいにして、もう眠ってしまった。糸が安いから— 『きよしこ』(重松清著、新潮社) P. 13

こんな風に「きよし、この夜」の歌を勘違いして覚えていた少年には、自分とよく似た名前の、目に

見えない友達がいた。おそらく、その少年は著者、重松清自身か、少なくともオーバーラップしている誰かである。吃音があつて、転校のたびに苦手な「か」行から始まる名前を自己紹介しなければならぬ。そんな寂しさを抱いた少年は、「きよしこ」には何でも話げできた(どもらないで)。きよしこは、「本当に伝えたいことは伝えることができる」

と教えてくれる。

小学校から大学受験の冬までの、七編の少年の物語。一つ一つ胸がつまる。苦手な音から始まるフレーズを避けるという反射的な判断、夏休みに通った行動療法セミナーですれ違うように出会ったひねくれ少年と残酷な「先生」たち、神社でキャッチボールをした変な「おっちゃん」、でも友達ができたとたん「警察に捕まったらいいのに」と思ってしまった少年の残酷さ……。少年の前を通り過ぎるいろいろな人たちが、ひとりひとり生きていて、いいところを小出しにしている。

この小説は、ある母親からの手紙がきっかけで書かれた、という設定になっている。

「もしよろしければ……息子に宛てて返事を書いてやってもらえませんか。吃音なんかに負けるな、と励ましてやってくれば、息子の心の支えになると思うのです。」(P. 6)

重松は、返事を書かなかった。そして二年後に、

この「個人的なお話」が生まれた。私小説ではない、という。

お話にできるのは「ただ、そばにいる」ということだけだ、とほくは思う。だからいつも、まだ会ったことのない誰かのそばに置いてもらえることを願って、お話を書いている。

この本に収められた話を、君は自分のそばに置いてくれるだろうか。世界中の誰よりも君にそうしてほしくて、ほくはパソコンのキーボードを叩きつづけた。

「個人的なお話」というのは、そういう意味だ。(P. 8)

もしかしたらこの設定したいフィクションかもしれないが、作り事とそうでないものとの間にどれだけの違いがあるのか、という気もしてくる。人に伝えたいことがあって、その方法はさまざまあるのだし、伝わり方もまたそれぞれなのだから。人を励ますようにして、「私も大変でしたが、今は幸せです。

だからがんばってください。」と言うことが、できる人とそうでない人がいるし、それで励まされる場合とそうでない場合もあるのだ。

『拡散 diffusion「アイデンティティ」をめぐる、僕たちは今』（大倉得史著、ミネルヴァ書房）は京都大学で臨床心理学を学ぶ大学院生が、エリクソンのアイデンティティ概念について、青年の当事者性から論じなおそうとする挑戦的な「作品」だ。研究論文といったほうがいいのだろうか。当事者（友人）に物語らせる、という方法の成功と、（他の場）を再認していく過程の生々しい語りが、日本教育心理学会でシンポジウムのテーマになるなどして注目を浴びた。友に語ってもらいながら、いいかげんにしろよ、と思ってしまう著者の心情の吐露なども面白い。

全編を通じて、いまだにこのように思い悩む学生がいるのかと驚いたり、四半世紀前の自分自身を彷彿

としたりもした。これは大倉も自覚しているように、「京大の学生」的な悩みなのではないかとも思った。「自己を物語る」という建前では、共通の両著であるが、研究書である『拡散』のほうが、どこかフィクション的な印象が強かったのは不思議だ。「事実は小説よりも奇なり」というが、言葉になったものは、そこからばらばらと意味を拡散し、またひとつの中心にまとまる求心性をもつ（バフチン）とするならば、小説の語りのほうが、ライブの語りよりも、心にまっすぐ突き刺さることもあるだろう。「きよし、この夜」の訳詞家がとうてい想定しえなかったような解釈（きよしこの、夜）をしてしまった少年が、その歌に癒されたように。

保育記録やカンファレンスでの話し合いなどを、保育実践研究にどのように活用できるかを考えていたときに、出会った二冊である。

（十文字学園女子大学）

昭和戦中期の保育問題研究会の活動(3)

自由遊びに関する研究

松本 園子

保育問題研究会(一九三六―一九四三)の活動の中で、今回は自由遊びに関する研究と、会の保育者による自由遊びの実際を紹介します。拙著の内容をベースとしておりますが、引用文献については、元の出典を示しておきます。

一、「自由時間」と「自由遊び」

まず、保育問題研究会における自由遊び研究の視点

について述べておきます。

会では、発足当初から「保育案」の研究に力が入られました。それは、保育所(託児所)にも幼稚園にも、幼い子どもが一日を過ごす場としては、それにふさわしい保育案(保育日課や保育計画)がない、という問題意識からでした。

保育案に関する会の報告には、「多くの所謂託児所が、終日漫然と子供を遊ばせるか、でなければ、子供

の生活環境を無視して幼稚園の模倣に過ぎない保育を行つて」おり、一方「幼稚園の保育が、ややもすれば型にはまって、清新な生活性を失はうとしてゐる」^{註2}と、当時の保育の有様が捉えられています。

このような状況を打破して、乳幼児の成長と生活にふさわしい適切な計画をもつ保育を実現するために、会をあげて保育案の研究が取り組まれたのです。この研究全体については、本連載で、のちほど取り上げる予定ですが、今回のテーマである「自由遊び」についての会の関心はここから、つまり、適切な保育案が無いなかで、単なる「放任」となっている「自由時間」のあり方を考え直すことから出発しました。

今日では当たり前前のことですが、自由遊びを「保育」時間以外の「自由時間」とみるのではなく、保育の内容として位置づけるべきだとして、そのあり方が考えられたのです。

二、自由遊びの調査

保育問題研究会発足後間もなく、幼稚園、託児所における自由遊びの現状調査が行われました。幼稚園、託児所を対象とする質問紙調査で、幼稚園一九、託児所九、計二八の保育施設から回答が得られ、第三回月例研究会（一九三七年一月）において、その結果が報告されました。

会は、七年の活動期間中に大小さまざまな調査を行いました。調査報告の冒頭に、「自由遊びの調査」は、その最初のもです。調査報告の冒頭に、問題の解決のために問題の所在を明らかにする調査を行い、それに基づいて研究を進めるといふ、その後の会の研究活動全体に貫かれた実証的研究姿勢が、次のように打ち出されています。

吾々が保育の問題を研究する場合に、研究が科学的になされるか否かは、一つに、問題の所在を

明らかにし、これを解決する方法が考へられてゐるか何うかにある。そして問題の所在を明かにするには何よりも保育の現状調査をすることが必要である……一つの問題を解決するには必ず、その問題の所在を明らかにするために調査をなし、それに基いて研究を進めて行きたいと思つてゐる。^{註3}

◇一日の保育プログラムにおける「自由時間」

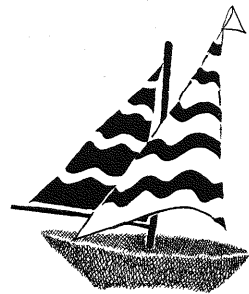
調査はまず、一日の保育の中で、自由な時間がどんな風に入っているかをたずねています。ここでいう「自由時間」は、遊戯をさせるとか、折り紙を折らせるとか、保育者が準備し、意図的に指導する時間以外の時間、という意味です。

幼稚園と託児所、またそれぞれの施設によつて、自由時間の捉え方と実態がさまざまであることが、調査結果から窺えます。

託児所では、概して「自由に遊ばされてゐる」つまり放任されてゐる時間が多いという状況が明らかになりました。とりわけ、幼稚園に比べて保育時間が長く、しかも保育条件が悪い託児所で、自由時間をいかに子どもにとって有意義なものにするか、という問題が自由遊び研究の中心課題であつたといえます。

◇遊びにかかわる保育条件

遊びの条件として、保育室や園庭に子どもたちが自由に遊べる広さが確保されていることが必要です。調査によれば、子ども一人当たりの遊戯室および保育室の広さは、幼稚園が三・〇平方メートル、託児所が一・七平方メートル、園庭の広さは幼稚園が一〇・三



平方メートルに対して託児所は五・〇平方メートルでした。ここでは、一般に、託児所の子どもは幼稚園に比べて不自由な場所で保育されていることが示されました。

保育者ひとりが受け持つ子どもの人数の平均は、幼稚園が一九・一人、託児所が二七・九人で、託児所の保育者は一般に一人が多数の子どもを指導しなければならぬ状態に置かれていたわけです。

受け持ち人数が多い場合、保育者は危険や混乱を避けるため、いたずらに管理・制限を強化したり、逆にまったくの放任となったりと、自由遊びへの適切なかわりが難しくなります。報告書は「保育学の立場から適当な受持児童の数を研究して、一般の規準を示す^{註4}」という、今後の課題を示しています。

保育条件についての研究は実際、その後も続けられ、さらに詳しい全国調査を経て、規準の提示にいたります^{註5}。保育問題研究会が、自由遊びを重視し、それ

を保障する保育条件を問題にして研究を進めたことは、注目すべきことです。

三、自由遊びの研究

以上の自由遊びについての調査では、他に遊具、玩具の使用についても調査されています。よく用いられるもの、喧嘩の原因となりやすいもの、が検討され、遊具の不足が喧嘩を誘発することが指摘されています。

また、子どもが遊ぶ態度について、八つの傾向（リーダーになる、独りで遊んでいる、何もせずにブラブラしている、人の遊びをまぜかえす、先生につきまとう、団体の仲間入りをしない、性的悪戯をする、性的悪癖がある）を挙げ、そのような傾向が見られる子どもが、各施設にどのくらい存在するかについても問い、結果が分析検討されています。

そこから、託児所の子どもは、幼稚園に比べて性格

などの問題を抱えている場合が多い（それは、生活・家庭環境に由来するものですが）という認識が示され、だからこそ保育制度を一元化し、託児所の子どもたちをもっと良い保育条件のもとで保育しなければならぬ、という会の制度改革の主張にもつながってきます（最近の「一元化」の動きとの関連で、この点については、機会を改めて取り上げたいと思います）。自由遊びについての、その後の継続的研究は、「遊戯と作業」をテーマとする第六部会の課題となりました。この部会では、チューターの牛島義友を中心に、自由遊びの条件と指導のあり方について、さらに詳しい研究が目指されましたが、十分には展開されなかったようです。

四、自由遊びの実践記録

保育問題研究会は保育者の実践記録を重視しました。実践記録を持ち寄り、それに基づいて保育の研究

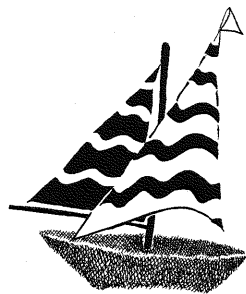
をすすめるというのが、会の研究スタイルであり、機関誌『保育問題研究』などに多くの実践記録が掲載されています。その中か

ら、自由遊び場面の実践記録を二本紹介しておきます。

これらは、「自由遊び」を記録することが目的ではなく、子どもの言語について、あるいは喧嘩についての研究を目的とした記録ですが、自由遊びの場面での子どもたちの成長のさまと保育者の配慮が生き生きと描きだされています。

◇汽車遊びの記録

まず、東京市麻布幼稚園の保育者、海卓子（戦後は白金幼稚園）の子どもたちの会話を注目した記録です。^註一九三七年九月、幼稚園の園庭の遊動木での遊び



の場面です。

遊動木で汽車遊びをしてゐる。年少組の子等数人ドヤドヤと来て乗らうとする。

K (男六歳)「今掃除するからどいて下さい。

屋根もみんな掃除するんだ。すんでから乗ってください。」

皆直に降りる。おさへに遊動木の上に渡してある板まですつかり掃除する。

先の一群の中からA子、左側の端に腰掛ける。

K「此処駅長さんの乗るところだから乗っちゃいけません。どいて下さい」A子素直にどいて後ろに座る。

K、保姆に「駅長さんになるんだからテープで巻いて、赤いの」巻いてもらつて得々として汽車をみてゐる。乗つて居たN (男六歳)にK「N、運転手になれ」と右端を示す。N云はれた通りにする。いよいよ発車した。

k (男六歳)遊動木の上に登らうとすると、立つて見てゐた駅長のK「k、登っちゃだめだよ。トンネルに入つたら頭つかへるよ」。k、降りる。

K、お客に「羽田飛行場行ね」A子うなづく。

K「もうせん、羽田飛行場止らずに行つたからこれ止らないのね」。稍ちよあつてNに、K「急行にしてね、止らないんだよ」。此の時お客のI「急行ね、此の間止つたよ」。K「もうせん、遠足に行つた時、止らなかつたよ」。I「止まつたよ」。

K「時々かい?」。I「ウン」

保姆「もうせんは遠足だつたから、特別に止らなかつたのよ」

子供同士の間では、多くの子供が非常に従順である事、各々が自分たちの生活の中でいろいろな決まりを作りそれを守つて行く事。自分たち丈の話し合で種々の問題が割に正しい解決に向つて行く

事。これ等は、子供は子供同士の生活の中で伸びる、と云ふ事を裏づけてゐる。(後略)

◇喧嘩とその処置の記録

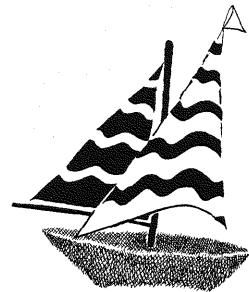
次は、東京市方面館託児所の庄司豊子(戦後は自由保育園、こぐま保育園)の記録です。喧嘩について研究していた第三部会で検討されたもので、自由遊び場面で、集団的な喧嘩がおこりそうになった危機を、保育者の働きかけで転換して、遊びに導いた例です。

一九三八年五月半ば、雨の日の朝、本郷藍染町方面館託児所の遊戯室での出来事で、登場するのは五、六歳の子どもたちです。

場面 ホールの片隅で女の子十人位、積木でお家を作りママゴトをしてゐる。男の子三人積木の箱に二三本残った積木を持ってポートを作らうと相談してゐる。

キツカケ 三人の男の子の中一番勢力のある一人

(信太郎)が黙って女の子の遊んでゐる所から積木をもって行く。それを見つけた女の子の方では大さわぎ



「黙って持って行く人はドロボーよ」。三人の男の子の中で一番気の弱い子が「貸してね」といつて借りて行く。次の子も「貸してね」と之につづく。初めのうちは一本づつ貸してやってゐるが、ずんずん少なくなるのもう貸してやらぬ。男の子の方では大きく作ったので積木が足りないから、なほ「貸して」「貸して」と持って行く。女の子の方でもたまらず清子がとりかへしに行く。それを信太郎がころばして泣かせる。これを見た女の子の方のリーダーのみつ子が信太郎にとびかかって行く。

処置及反応 両方の理由を聞いて先ず始めに積木を同じ数に分ける事にした。二つに分つてみると数が少なくて両方ながら面白くないと云ふ。「ではみんなでボートを作りませう、そして女の人もみんな一緒に乗つて遊びませう」と云ふとみな喜んで参加する。

終結 ボートが出来上がった。ピアノに合わせて皆で漕ぐ、一生懸命漕ぐ中で一艘では面白くないから二艘にしようということになり男の子も女の子もすつかり仲善となり二艘のボートを作つて競漕する。

*

海卓子さんも、庄司豊子さんも、戦後の保育をリードしてきた方です。その原点は、二十代の若い保育者としての、このような真摯な学びにあったのです。

(淑徳短期大学)

註

1 松本園子『昭和戦中期の保育問題研究―保育者と研究者の共同の軌跡―一九三六―一九四三』新読書社、二〇〇三

2 第一部会「保育案の研究」『保育問題研究』二巻四号、一九三八・四（拙著、二部一章七節「保育案」）

3 保育問題研究会「自由遊びについての調査」『教育』五巻二号、一九三七・二（拙著、二部一章五節「自由遊び」）

4 註3に同じ

5 拙著、二部二章三節「保育施設の条件」、六節「本邦保育施設調査」七節「二元化構想と施設標準」参照

6 海卓子「幼児の会話と遊び」『保育問題研究』一巻一號、一九三七・一〇（拙著、二部一章四節「話し合い」）

7 三木安正「第三部会研究記録・喧嘩とその処置(1)」

『保育問題研究』二巻八号、一九三八・八（拙著、二部

一章二節「喧嘩とその処置」

変化が起こす変化(2)

村田 愛

ポジティブサポートは「変化」を生みます。今回はこの変化についてアダムの場合を紹介しました(註1)。さらにもっとアダム自身が「生きる手ごたえ」を感じられるようになるには、私たちが何を変えるべきか、具体的な形で変化を起こすことが必要だと考えました。

ポジティブサポートのセッションの特色は、本人の立

場で考えること、具体的な現実に基づいて具体的な発言を求められることが挙げられます。そして、ポジティブサポートを発端として可能性を追求し考え続ける多くのヒントやパワーを得ることができます。アダムの場合、これらのポジティブサポートの特色が有効に働き、大きな変化をもたらしました。ポジティブサポートを継続す

ることにより、現実の変化に対応して、新たに必要になる変化を的確に捉え、柔軟に対応していくことが可能となり、これらのことがアダムと周りの環境のポジティブな変化の連鎖を導きました。

前回の内容から

ポジティブサポートを提案した理由・期待したこと

六人の知的障害、おもに自閉症と診断された小学部の高学年クラスで実習していた時、アダムという生徒がいました。アダムはいつもニコニコしていて、立ち上がりクルクル回りながら優しく自分の頬を叩くのが印象的なハンサムな男の子でした。学校の個別教育計画書を提出しなければならぬ時、アダムのことがあまりにもわからずポジティブサポートを提案しました。過去の計画書を見ても、同じ内容のものが引き続き目標とされているだけのものでした。つまり、その計画は、あたかもアダ

ムは何も学ばずに何年も学校生活を送ってきたかのようにな不自然な物でした。しかし個別教育と掲げるならば、私はアダムにとって優先順位の高い、意味のある目標や計画を考え出す必要性を感じており、それに同意してくれたそのクラスの担当のスタッフと共にポジティブサポートを継続して行っていました。

ポジティブサポートは、その人をとりまく環境、すなわちアダムの場合家庭や学校で関わる人々に参加してもらいセッションを行うものです。アダムは、スクールバスで登下校するので、家族との接触がほとんどありませんでした。ポジティブサポートを行うことでアダムが何を望み、どのような人間関係の中で過ごしているかなど、家族の参加によって知りえることや、徐々に家族との協力体制ができることを私は期待しました。また、アダムの学校生活を家族に知ってもらえることで、よりアダムが過ごしやすい生活になるのではないかと考えました。しかし、家族は仕事やそれぞれの都合で、ポジティブサ

ポートに最後まで参加することはありませんでした。

ポジティブサポートを継続していく中で、私たちはアダムの「今」の現実を問い直していくこと、問い直しに基づいて変化させること、そして、またアダムと環境の持つ異なる可能性を考え具体化し、行動に移していくことに焦点を合わせていきました。それらをくり返し、その時その時の必要性、優先しなくてはいけないことに応じてアダムの生活をアダムと共に考えていきました。

一、「問い直す」Ⅱアダムにとっての意味、優先順位

アダム、クラスの担任のベス、アシスタントのグロリア、スピーチの先生と私で行っていたポジティブサポートでは、まず、学校内での時間についてそれぞれが持つアダムにとっての意味、そして優先順位を考えていきました。例えば、「アダムの興味・関心」という課題でポジティブサポートのセッションを行い、アダムはどれだ

け教室にある物に興味を向けているか、それらのつながりという意味をわかっているか、そして、他に興味を向けているものが何なのかなど、話し合い、いろいろ試してみることから始めました。

スピーチのレッスンの時には、色や数の認識を主に行っていたのですが、アダムが自分の名前を認識することや周りのクラスメートの名前を認識するように変えました。アダムにとって一番日常的で生活に密着していることを優先し、数や色などそこから懸け離れたものは後回しにしていいのではないかと話し合いました。

そして、「アダムの表現していること」という課題でポジティブサポートのセッションを行った後、私たちはアダムが自発的に具体的に表現するコミュニケーション



の取り方が見つかっていないという決定的な問題に注目し、PECS（註2）を提案しました。PECSは、単語が絵と文字で正方形の枠に表示してあります。アダムにとって必要な意味のある単語を一つ一つマジックテープで貼り出すことによってアダムが表現したい単語を自分で取り出し相手に示すことができるようになっていくのです。

アダムの下校時に行っていたポジティブサポートのセッションにはアダムも参加していたので、一緒にそれぞれのポジティブサポートの段階を踏んでいる感覚を持っていたように感じられました。みんなの気持ちがいっても、アダムの今からつながらる次への展開／可能性に向かっています。アダムが自ら発することが出来る表現方法として、PECSを使用し始めた頃、私たちはアダムが意欲的に何かを取り入れようとしている姿を初めて見たように思えました。ポジティブサポートが終わりスクールバスに乗り込んだ後、アダムが窓越しに私たちに

笑顔で微笑みかけてくれることもありました。

アダム達は登校するとまず学校の大きな食堂で朝食をとります。その朝食は、日本でいう給食のようなもので、ビニールに入ったドーナツやジャムパンと牛乳が用意されています。ある朝、アダムが自分のドーナツを食べ終え、私の顔をニコニコ覗き込んでいたので「どうしたの？」と聞くと、アダムは「待ってました」という顔をして自信ありげに身に付けているPECSセットの中から「ドーナツ」を取り出し、嬉しそうに私に手渡しました。アダムが真剣に「言葉」を探し、目を輝かせて伝えてくれる姿が何とも嬉しく、思わずドーナツがどこかで余ってないか探してアダムにあげ、その幸せそうに食べる姿を見守っていたことを思い出します。

「アダムの考える姿を見るようになった」アダムの姿が変わってきたことを他のクラスの先生にそういう風に指摘されるようになったのもこの時期でした。

二、「起きた変化」 Ⅱ表現力が持つ力

受け身だけでなく、アダムから自発的に伝えられる方法を知ったアダムは、ボキャブラリーだけではなく、表現力が豊かになっていきました。アダムは周りの人への関心が出てきたようでした。人の顔を覗き込み問いかけたり、訴えたりするようになりました。

スピーチのレッスン中アダムが突然立ち上がり、不可解そうな表情で黒板の方へ向ったのでどうしたのかと見ていたら、出席を示す生徒それぞれの写真が貼ってあるところへ行き、クラスメートのヘレンの写真が剥がして担任の先生のバスに手渡しに行きました。その日ヘレンは風邪をひいてお休みでした。バスは写真を受けとりながら、「ばたばたしていて、伝えてなかったけれど、そう今日ヘレンは風邪でお休みなの」と言いました。今までその様に他のクラスメートのことに関心を示すことなく、クルクル回っているいつも穏やかなアダムの印象

が変わり始めた時でした。

次のステップとして、「アダムが表現したいことを相手を選ばず誰にでも必要な時に表現できるようにになるとアダムの人間関係も広がるね」とポジティブサポートの後に話

したと思っただけに、アダムは自ら達成し、誰にでも要求したり伝えたりするようになりました。

教室の手作りの時間割りが黒板のわきに貼ってありました。それは、教室にある時計の絵で時間が表示されているものと、授業科目が絵と文字で示されラミネートされているものを、貼って組み合わせるようになっていました。授業が終わる度に生徒の誰かが剥がしてくれていたのですが、アダムが積極的に剥がしてくるようになってからはアダムの役割になりました。そうして、学校内での時間が、お互いに見通しが持て、スムーズに流



れるようになると同時に、アダムとのかかわりに手ごたえが持てるようになっていきました。ポジティブサポートを始める前には何に関心を持ち、何に心動かされるのかわからなかったアダムが、教室内にあるものや人に関心を持ち始め、また視覚的なものに意味やつながりがあることの理解を示してくれたのは初めてでした。

アダムにとっての問題

アダムは自分のPECSセットを身に付けたまま家に帰っていました。連絡帳には、家族がわかりやすいようにその使い方を簡単に示し、アダムが何かを欲しがったりする時はアダムに問いかけ、それを使ってコミュニケーションをとることを促していました。しかし、アダムはPECSセットを家に忘れてくるのが何度もありました。ある日、学校に着いて朝食を食べている時、アダムは泣いていました。その日も忘れてきてしまったのです。それは、アダムにとって過ごしにくい時間を意味し

ます。アダムは泣いたり、怒って自分の頬を叩いたりして忘れてきたことを表現するようになりました。アダムにとって、PECSセットが必要なものになっていたのです。その時の悲し気な顔からは、「アダムの表現」を失いどうすればいいのかわからない程の喪失感さえ伺えました。私は、必要なら自分で大切にしてい、忘れて来ないように気を付けてねとアダムに伝え、代わりに使えるようなものを用意しました。連絡帳にも、アダムがPECSセットを忘れないように気を付けてあげて下さいと書きました。

その頃、アダムの鞆の中に家族からのお手紙が入っていて、「家でこんなことは無かったのに、アダムが時々怒って自分の頬を叩いたり、物を叩いたりすることがある。このようになるのはどういうことなのか、そんなことが学校でもあるのか、学校で何かあったから家で暴れるのか。困っている」という内容でした。その時、家ではアダムとのコミュニケーションや関わりは何も変わっ

ていなかったことがわかりました。

三、協力度制の必要性

学校生活の中で、自分が表現することが相手に伝わることの満足感と充実感／達成感を感じるようになったアダムは、開けていく感覚を覚えていたと思います。彼の人生観や世界観もが変わったのではないのでしょうか。そして、彼のそのような変化を家族が受け入れてくれることを彼は必要としたのでしょう。彼の変化と共に、周りも変化することが求められていたのでしょうか。

私たちは家族に連絡を取り、学校でのアダムの意欲的な姿勢やコミュニケーションの取り方などを伝え、家庭でも使えるよう家庭専用のPECSセットを用意しました。アダムが不自由感を家族に表現できたたくましさも、家族から連絡をしてくれたことも嬉しく、私たちは何かが変わる期待を持ちました。

PECSセットに関しては、アダムが使いこなせるよ

うになってきているので、後は、家で使うボキャブラリーをアダム用のPECSセットに増やしていきたい、ということと、家族で積極的にアダムに問いかけ、やりとりをして欲しいと願っていました。

四、変える力

それからアダムが家で過ごしやすくなったことは、月曜日の登校した時の表情でわかりました。ある月曜日とても嬉しそうに登校し、クルクル回りながら私に抱き付けてきました。「何かすごく嬉しいことがあったんだ」と言う私の目を見て微笑みました。そして、「どうしたの?」と言うとアダムはPECSセットの中から若い男の人(お兄さん)を取り出し見せてくれました。そして、私が「お兄さんとこの週末どこかへ行ったの?」と言



うと、もう一度PECSのセットから何かを探し出そうとしていました。しかし、食べ物のところで見つからないらしく困っていました。私がそれを見て、「お兄さんと出かけて何か食べてきたの？」と聞くと、顔をくしゃくしゃにして喜んでいました。その日の連絡帳にその時のアダムの様子を書いて二日後、実はその週末アダムのお兄さんがアダムを散歩に誘って出かけたなら、途中でアダムがフライドチキンのお店に入ろうと指差したので、食べて帰ってきたと書いてあり、「フライドチキン」をアダムのPECSセットに加えて欲しいと書いてありました。私たちは嬉しさのあまりみんなでそれを回し読み、感激しました。アダムが家族の中で提案したり、自然なやりとりが成立していることがにじみ出ていたからです。

気が付くと徐々に私たちも家族とコミュニケーションが取れるようになってきました。ポジティブサポートに家族が参加しないにしても、協力体制ができてきたのです。

アダムのことを振り返り、私の中で様々なことが整理されていきました。自分の世界しか持っていないように見えたアダム。手探りしても手ごたえが持てなかった空しい時間。そして、始まったポジティブサポート。何も意味を成していない様なアダムの過去の個別教育計画書に対する憤り。それに反発するように勢いづいたどんな程アダムを知ることへの欲求／探究心。そして、アダムの意欲的な表現と関わりに対する向上心と吸収力。そこで改めて私たちが意識した可能性。そして、アダムが変えた家族との関わり。健全な変化の連鎖反応。

コミュニケーションがうまくいきアダムがPECSを使いこなしても、表現しきれないこともあります。お互いに行き違ったり、先取りしすぎてしまったりしてしまふことがあります。そこで、アダムが怒ったり泣いたりして訴え、私も自分の理不尽な態度や応対に気付き、アダムに謝るといったやりとりもできるようになりました。

た。その逆で、アダムも行き過ぎたことをして、誰かがアダムを怒るという場面も出てきました。そこには一緒に育んできた関わりの深さと強さがあり、お互いに手ごたえが感じられました。表現力を身につけることで自分を意識しやり取りする喜びを知ったアダムは、徐々に、PECSセットだけに頼るのではなく、その場でどうにか表現する方法も見つけられるようになりました。

アダムは表現方法を得ることで、自分を意識するようになり、それと同時に周りの人を意識するようになりました。人と関わることの喜びを得ることと同時に、伝わらない時の悔しさを知ることにもなり、喜怒哀楽がはっきりしてきました。自己主張しながら、協調性を持つようになりました。他の人達と共有する世界が見えた時、アダムの中で「自分」が目覚め、一気に世界が開けたような感覚を彼は味わったのかもしれませんが。

もう後戻りのできないアダムにとって重要な変化を周

りの人達が受け止めてくれない時、アダムが動揺するのは当然でしょう。アダムはたくましく、その時その時の不自由感を訴えるようになり、周りの人々が協力的になる必要性を気付かせてくれました。アダムの自尊心、生きるエネルギーを感じました。その変化、つまり「今」という現実を受け止め共に変わっていくことが、どんなに私たちの生活の中で生きる手ごたえとして返ってくるか、そして、それが生きるエネルギーとして私たちの中で「希望」となること、それを教えてくれたのがアダムでした。

(ポジティブサポート研究室主宰)

註1 「ポジティブサポートの世界」(7) 変化が起こす変化(1)

「幼児の教育」第一〇三巻第六号

註2 PECS: Picture Exchange Communication Symbols

(Mayer-Jonson Co. 1994)



障害をもつ幼児の保育(24)

—この子と出会ったとき—

津守 真 (M)

津守 房江 (F)

水——なぜこんなにも水遊びが好きなのか

「水遊びばかりやって」という大人の声

F 子どもはどの子も水遊びが好きですけれど、とくに愛育学園では好きな子が多いですね。朝からずっと水遊びをしていて、それが長く続くこともありますね。それにたいして何か周囲から批判のよう

なことはありませんか。

M 批判というより心配する親もあります。「水遊びばかりやっていては体験が片寄るのではないかなど尋ねられることはしばしばです。」

F それにたいしてどのように答えるのですか。

M 私は「子どもが自分からはじめたことはどん

なことでも、意味がある』と話しています。大人には、形にならないことは分かりにくいし、その子にとっての意味をくみ取りにくいのです。それをどうやって分かるようにするかは、私たち専門とする者の大事な仕事だと思います。多くの人に分かってもらうには、言葉で説明するだけでなく、ビデオなども有効なときがありますね。親たちは焦ったり戸惑ったりする気持ちもあるでしょうが、子どもの心の深いところを見ることに慣れていないのです。

その意味で、『形が残らない造形活動』（註）ビデオはとてもよかったと思います。

『形が残らない造形活動』のビデオ

（水のビデオ）が教えてくれること

F あのビデオを久しぶりに昨夜見ました。子どもの視点で水がどのように見えるのか、子どもを出さないで語ろうとしているのです。いつも子どもが

やっている水遊びをこのような形で見せられると、本当に美しいし、意味のあることだと分かってきます。

M 『生成展』のときあのビデオを見て、愛育に来はじめたころのJ君のお父さんが、感動して納得してくれました。お母さんに電話をしてお母さんもうぐに見に来てくれたことは忘れられませんね。

F 玉杓子のうちがわに当たった水が八方に散る様子。さざ波のようにコンクリートのうえを次々流れる水。マンホールの蓋のうえに飛び散る水。外の梁に水を当てて滴となっていたり落ちる水滴は、まるで今生まれた水の坊やみたい。言葉でこのように説明しても尽くせない美しさと、子どもの心を表すものがありますね。

M 子どもたちの水遊びに打ち込む気持ちが分かります。

このビデオとともに作られた、西原彰宏、山田陽

子他のOMEPP世界大会論文には『力強さ、激しさ、おだやかさ、優しさの感覚を、水と一体になつて表現する体験』と書かれ『生きていくことの感覚を明確にしているのではないか』とも書かれています。これは本当に共感出来ます。

『イメージ』と『認識』との違い

M 愛育で子どもたちがやっている水遊びは、全身を打ち込んでやっている水遊びです。小手先の問題ではなく自分が水と一体化して遊んでいます。

F 子どもが水と真剣に遊ぶとき、その感じている世界は言葉では表わせないですね。イメージとか感性は流れる水のように拡散してしまふようです。でも、そんなふうを感じる自分を長い時間をかけてしつかり認めることで、自分というものが出来ていくと思います。どうでしょう。

M そうね、感性と認識、知識とは違いますね。こ

の子たちは感じる力が人一倍繊細で豊かです。感じたことを言葉で表そうとすると、生きていたものが動かなくなり、この子どもたちの感じていたものは離れてしまう。繊細な感覚のこの子たちは体全体で感じたことを言葉の枠の中に入れることはできないのでしよう。

F ああ、それが気がついたのですが、このビデオに出て来る水遊びの主人公たちはどの子ども言葉が出ていません。いわゆる自閉症といわれる子どもたちです。

どうして言葉が出ないのかは分かりませんが、言葉を使わずに水遊びの中で自己の確認をしたり、心



の表現をしているのですね。『言葉をもたない詩人たち』です。

子どもにとって

言語表現を超える遊びの中の表現

M うちの孫の一人のT夫が一歳半ころ、家の引越して落ち着かない時期、新しい家の隣家から度々「子どもの声がうるさい」と苦情が来るということがあったでしょう。

F そうそう。

M あのあと親子ともに不安定になったとき、T夫は「キーツ」というばかりで言葉が出なかった。

暑くなって窓を開けるころが一番大変で、隣家から苦情が来るので暑い中を自転車に子どもを乗せて母親が連れて歩いていたのですね。

それで、アセモが背中に出来ていた。何とかしなくてはと、私が訪ねて行くとお風呂場で水遊びを何

時間もしたけれど、それは激しい水遊びだった。風呂桶の縁から飛び込むバシャンという音がして水が飛び散り、お風呂場の前まで水浸し。幸いお風呂場は隣の壁が厚くて音が漏れなかったけれども、家中には相当響いていた。でもその水遊びでT夫は落ち着きを取り戻したのです。

F一年以上かかりましたね。

M 母親はあまりの激しさにはじめは「それは、やらせないで」と言ったのです。

日常生活から見ると、あまりに逸脱しているように見えたのでしよう。でも、それを機会に父親も年上のきょうだいたちも幼いものにたいする見方が変わりました。

F 数週間たって私が訪ねて行って水遊びをしたとき、蒸し暑くて一時間以上したら私の方がもう耐え難くなりました。それで「もう、おしまいにしてう」といってお風呂から出そうとしたら、T夫が

「キー」と言ったのです。上の女の子が来て「自分から出たがらないのに出そうとしたらだめなの」「ジージー（祖父）はそんなことしない」（笑い）と教えてくれました。

大人が表現をうけとることは、

子どもの自己確認につながる

F それから二年以上経って、先日、この四月から幼稚園に行くようになったT夫の家を訪ねたとき、入園式の翌日で少し緊張して帰ったところでしたが、お風呂場で水遊びをやりました。このごろはあまり水遊びはやらないと聞いていたのに……。

昼間なのに電灯をつけて水しぶきをあげてお風呂に飛び込むと、水しぶきが美しく輝くのです。私も見ていてつくづく素敵だと思いました。

子どもは夢中になって遊んでいて、水という物質と一体になっている。意識して表現しようとして

やっているのではないのに、私に「見て、見て」としつこいくらい言うのはなぜかと思いました。

M 見るものと見られるものと……慈しんで見るものがあるから見られている自分を『よきもの』として感じることができる。水遊びのやり方は子どもによつてそれぞれ違うけれど、やらせたままにしておくことはありません。一緒になって濡れながら、その子の見ているものや感じているものに、共感している大人がいることが大事なのです。

註 洪谷のギャラリーで愛育の子どもたちの作品を集めて『生成展』（一九九五年）をしたとき、形にならない造形活動として子どもたちの水遊びをビデオに収めて会場に流した。（西原彰宏、持丸和子、その他沢山の職員がかかわって作った）

その後OMEP（世界幼児教育機構世界大会）にも理論的な部分を加え、深めて英文で発表した。

乳児クラスの保育より(3)

一年の終わりと始まり

— 一歳児クラスへの進級 —

田辺 敦子

毎年のことですが、梅の花や沈丁花の香りが届く頃になると、いよいよ一年間の保育のまとめをする季節がやってきたのだと身体が感じるようになります。今回も、やはり例年と同じように、春の香りに誘われるようにして進級に向けた保育が展開されていきました。そして、その一環として行われた「引越し作業」は、子どもたちにとって、そしてその子どもたちと一年を共に過ごした私たち保育者にとっても、とても意味深い経験であったのではないかと今改めて実感しています。

周知のとおり保育園には春休みがありません。保育時間も長く、保育室は開園時間から閉園時間まで常に子どもたちの生活スペースになっています。その為、引越し準備や大掃除も保育が営まれている中で並行して行われることになります。勿論、保育を行うにあたっては子どもの生活や遊びが安全に保たれていることが最優先になるので、大掃除の作業そのものではできる範囲の中で無理なく行わなければなりません。この条件がプラスかマイナスかということは捉え方ひとつで変わってくるのだと思いますが、それはさておき私は今回の取組みを通して、たとえ乳児であっても、この引越しのプロセスを子どもたち自身の目で見ることがとても重要なことなのだと感じました。

さて、今回の大掃除は、保育室のガラス窓や受け入れコーナーに掛かっている白いレースのカーテンを洗濯することから始まりました。普段さり気なく掛かっているこのカーテンも、いったん外してみるとその意義は思いのほか大きく、やわらかい陽射しを保育室に導きながら、落ち着きある空間を演出してくれている大切な存在なのだと気づかされました。子どもたちも、カーテンのない空間にきよろきよろしながら、目に飛び込んでくるクリアな外界の様子に心を奪われているようでした。特にその時丁度きれいに咲いていた園庭の杏には、うっとりしたり指差しをしたりしていま

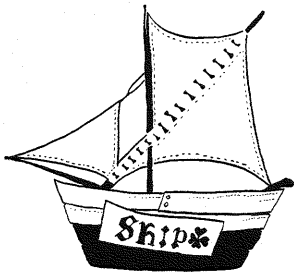
した。

ところで、乳児保育では個別の生活リズムに合わせて各々の日課が立てられているが、細やかな育児行為を行う中では、複数担任とは言え一度にまとまった時間を作って大掃除に当てることはできません。そこで、序盤のカーテン洗いに続くガラス磨きやベッドの汚れ落とし、棚拭きや愛着ある遊具の洗濯などの細かい作業は、タイムミングを見計らって少しずつすすめていくことになったのですが、この『細切れ大掃除』には驚きの利点がありました。生活の一部として大掃除の様子を垣間見ることにより、日頃見せていたお掃除遊びよりも一層、本格的な再現遊びが展開されるようになったのです。大人の動きを観察する際の視点による違いなのか、再現の仕方には様々なタイプがありました。例えばKちゃんの雑巾がけでは、自分に届く範囲の棚を拭いていた今までのスタイルに加え、背伸びをして高い部分の壁を拭こうとする技を身につけました。またMちゃんは、洗面器を近くに用意しておき、こまめに雑巾(布)を濯ぐという清潔振りを披露してくれるようになりました。「大掃除のお手伝いをしてくれてありがとう」と声をかけると、『うん、うん』と首を縦に振って褒められた喜びを表していました。また「一年間お世話になったお部屋にありがとうを言いながらきれいにしようね」「みんなは大きくなったから、お隣のお部屋で遊べるようになるのよ。楽しみにしようね」「みんながお兄ちゃんたちのお部屋にお引越し

したら、ここには赤ちゃんが来るのよ。みんなもね、前はちいさな赤ちゃんだったのよ。覚えている？」。熱心に大掃除の模倣遊びをすすめる子どもたちの手が休んだ時などに子どもたちの一年間の成長を喜ぶ言葉をかけると、不思議そうにこちらを見ながらうなづいていました。

思い返せば、入園当初まだ腹這いや仰向け寝の姿勢で遊んでいた子どもたちが、一年後にはちよこちよこと足音を立てて小走りしながら移動するようにまで成長しました。そして、一年の締めくくりとしての大掃除をも見事に模倣するまでになったのです。私自身もいつしか、日々の保育の積み重ねがあつてこそ得られる幸せな思いに包まれていました。

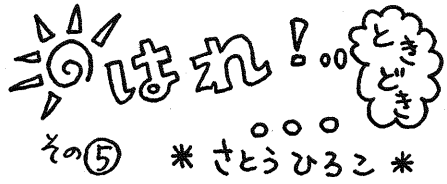
大掃除の模倣遊びを通して、自分たちが大きくなったこと、まもなく生活の場が変わろうとしていることを感じ取った子どもたちは、その後も引き続き安定した中で生活することができました。日々の遊びの中でも、『大きくなったかな？』（身体測定ごっこ）をしたり、ごちそうを作ってお祝いをしたり、またこの一年間の四季折々にうたったわらべうた遊びや唱えた詩を再度楽しんだりと、大人も加わりながら〇歳児クラス最後の遊びを満喫しました。



さて、いよいよ引越し本番となった際の子どもたちはどうであったかというところ、ほとんど戸惑う様子を見せずに隣の保育室へと移動することができました。幸い進級先の一歳児クラスも、私を含めた持ち上がり保育者が担当になったため、進級後も不安そうな様子はなく、むしろ一歳児ならではのやんちゃ振りを発揮する日々となりました。

子どもたちにとって、生活環境の変化はとて大きなできごとです。私たち保育者は、子どもたちがこれから体験する新しい出会いが少しでも楽しいものとなるように、また希望を抱いて前に進んでいけるように、導入と終結を上手に用意していけるような保育のセンスを磨いていかなければなりません。その練習として、まずは自身新しいことに会おう際にも、構えることなく、楽しみをいっぱいに見出して向かっていけるようなテクニクを身につけていくというのもよいかもしれません。私も、保育のセンスを磨く為に、日々の生活の中でもアイデア豊かに過ごしていきたいものです。

(かしのき保育園)



夏やすみ

七夕を過ぎる頃になると、お弁当やお帰りの時間は、子どもたちの夏のお楽しみの話題で賑わう。

「あとじゅっつかいねたらね、ながのおばあちゃんちに、おとまりにくんだよ」

「あたしね、みんなでグアムに行くの」

特に初めての夏休みを体験する人たちは、近づきつつある楽しいイベントに心を躍らせているよう。

子どもたちの楽しい話題に耳を傾けながら、私も気分はもう夏休み。行ったことも行けそうもないグアムで、のんびりくつろいでいる自分を想像したりしている。

三十五人の子どものちとの毎日の暮らしは、本当に刺激的で楽しいのだけれど、一学期は刺激の方がいささか勝っているようで、終業式を迎える頃にはちようどいい具合に、お互い少々うんざりし、しばらく顔を見なくて

もいかな...、なんて思ったりする。

ところが、少なくとも私の方は、八月のお盆過ぎくらいから、だんだんと、

「みんな、どうしてるかな？」と思い始めるのだ。

子どもたちから届いた葉書に、かわいらしい字で、

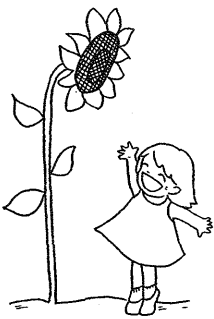
「おげんきですか。あいたいです。〇〇より」

なんて書いてあったりすると、もしかしたら母親に言われて書いたのかもしれないその言葉に素直に喜び、

「私も会いたい！」などと思うのだから、私は保育の仕事がやっぱり好きなのかもしれない。

九月の久しぶりの再会は、嬉しさのあまり、いつもなんだか妙に照れる。子どもたちと一緒に園庭をひた走りして、やっといつも

の調子に戻ったりする。そんな新鮮な出会いが出来るのも夏休みがあるおかげかもしれない。(幼稚園勤務)



編集後記

精一杯の日々を過ごしやつと辿り着いた幼稚園教諭一年目の夏休み。私が勤めていた園では、夏休み中の出勤日は一日だけで、他の日は研修日となっていました。

保育者向けのセミナー、版画や和太鼓の講習、音楽リズムの練習と発表会に参加しましたが、特に先輩先生に勧められたのは観劇でした。

幼い時人形劇を見せてもらったという事実はあっても記憶が無く、僅かにテレビで見ただけでどんな人形劇があるかも知りませんでしたので、可能な限り数多くの人形劇を観に行きました。その中には私がテレビを通して大好きになったものもあ

り、懐かしさと共に生の舞台の楽しさを知ることができました。

*

現在、地域で親子劇場という団体に所属しています。ここでの活動の柱の一つに子どものための優れた舞台芸術の鑑賞がありますが、会員が激減する中で、自分たちの会費だけでは大掛かりな作品の鑑賞は難しくなってきました。そこで、(会員ではない)地域の子どもたちと一緒に鑑賞できる企画をするようになっていきます。時間も手間もかかり、人が集まらなかつたらというリスクもありますが、それでも自信を持って、みんなで優れた作品を見ましよう、と言えるのは、シャワーを浴びるようにたくさんの人形劇を観ることができたおかげなのだとして二十年前の夏を思い出しています。(河合)

幼児の教育

第一〇三巻 第八号

(二〇〇四年八月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十六年八月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二-1-1

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-1820 東京都港区三田五-1-1

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一四一九

☎〇三-五三九五-六六一三(営業)

☎〇三-五三九五-六六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇-1-19640

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。

好評発売中

日々の保育にうるおいと心地よい緊張感を与えてくれる「園行事」のアイデアを豊富に紹介する新実技シリーズ



やまもとかつひこ 監修 / 関西あそび工房 著

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)

行事別保育のアイデアシリーズ ① 元気がいっぱい 夏期保育

夏は、子どもたちにとって魅力いっぱいの季節。保育者のかかり方一つで、夏の魅力がどんどんふくらんで、子どもたちの育ちがもっともっと豊かなものになります。本書は、保育者の発想を広げ、豊かな「夏期保育」を展開していくための「遊びのレシピ集」です。



ワークショップりんごの木 著

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)

行事別保育のアイデアシリーズ ② みんなにっここ 運動会

「ふだんの子どもの遊びを運動会種目につなげたい」「見ている人も楽しめるものになりたい」「いつもの種目をもっともとおもしろくするためには」など、保育者と子どもたちの工夫が生かされた運動会の新しいアイデアを多数提供。子どもも保護者もうれしい、新しい運動会のヒント集です。



小林紀子 編著

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)

行事別保育のアイデアシリーズ ③ 心を伝える 入園式・卒園式

どんな入園式・卒園式が、子どもたちや保護者にとって魅力的なのでしょうか。本書は、さまざまな保育の場で行われている「入園式」「卒園式」にスポットをあてて紹介。独自の「入園式」「卒園式」を工夫するためのヒントとなります。



行事別保育のアイデアシリーズ ④
みんなで作ろう
発表会
花輪 充 著

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)



行事別保育のアイデアシリーズ ⑤
みんながわくわく
クリスマス・お正月
島本一男 著

AB判 96頁
定価 2,310円(税込)

キンダーブックの **フレーベル館**

いつもの保育をパワーアップする、リーズナブルなミニブックシリーズ!

最新刊

パワーアップ保育SERIES

ともだちたくさんできるよ!

生きる力を育む しぜんあそび・なかまあそび



森 良 著

五感をたっぷり使って自然の不思議さを見出し、自然となかよしになれる“しぜんあそび”と、自分や他人の良さを認め、豊かなコミュニケーション能力を育む“なかまあそび”を多数紹介。

17cm×18cm 48頁 定価998円(税込)

【既刊】好評発売中!



田中世津子 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

10分でつくって60分あそべる
カンタンばわふるおもちゃ 1



田中世津子 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

10分でつくって60分あそべる
カンタンばわふるおもちゃ 2



斎藤二三子 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

ミニミニとこはを遊ぶ
ぼっかばか手遊び・指遊び・ハンカチ遊び



木村実咲 著
17cm×18cm 48頁
定価998円(税込)

0・1・2歳児
赤ちゃんのスキミングあそびとおもちゃ

キンダーブックの **フレーベル館**

以下続刊